

目的 工芸用皮革染料は数多く市販されている。しかしこれらの染料使用に際しては、経験からの勘で使用の最適条件を探っている事が多い。また手工芸用タンニン鞣革の染色後の変退色は布に比べて不良である。そこで染料使用についての最適条件（染料の溶解性および染色革の染色堅ろう性）を検討して実験を試みた。

方法 供試染料：市販の皮革工芸用染料（アルコール染料13色，レザー染料13色，塩基性染料11色）。供試皮革：成牛革（タンニン鞣，厚さ1.5mm），成牛白革（合成タンニン鞣，厚さ1.6mm），合成皮革（厚さ0.6mm，アキレス化学），成牛革はバット部より裁断。試験方法：。染料溶解性---エリフ20.1法による。溶解媒は水で行った。。溶解性の判定---肉眼により口紙上に滴下した染料溶解の拡散，乾燥状態を判定。。革の染色方法---刷毛引法により濃色（20回染色），淡色（5回引染），染料濃度は最適溶解濃度，染色堅ろう度試験---JIS-L-0849-71'摩擦に対する染色堅ろう度試験方法，JIS-L-0842-71'耐光堅ろう度試験方法

結果 染料の溶解性は，各染料間に差はあるが濃度1～5%で均一に溶した。溶解温度は60℃が最も良好でついで20℃であった。耐光，摩擦（色落ち現象）試験の堅ろう性は，各染料とも成牛革，成牛白革は極めて低かったが，アルコール染料のグレー，黒は変退色が少なかった。また染色革にエナメル仕上げを行うことにより色落ちが緩和されることが判った。合成皮革についてはどの染料も耐光，摩擦とも優れていた。この事から染色革の変退色現象は染料そのものの変退色ではなく皮革自体の変色が影響する事と思われる。